

912.3

7

空田士太轍

源太夫

耶鄭

放生川

天轍

藉羽

栴枝

金札

唐取

吳服



ワニ大匠付

○ 面古を教

太教、他り初教

脇入

為僧子袷衣大口腰、肩トモ取言也

押乞を扶系院お侍之命所長下也相也

内裏あり七田此管経の口入兼後者津の

お天のまもるのあり侍るとりて入徳なまを教

上子の相のお乞をとりて入用上りた教

位者此樂人面古とりて乞もおとらぬ

右教乃上子の相の作乞をとりて入死

五

あつちり人の書やみぬくうらぬぬと由
裏あし七日の夜終る入の俊若界

月あつちり人書やみぬくうらぬぬと由
を同わら書
と人志まことなりき人そをぬ部よより
一 衆北なる着ふおる海月乃面 身を
三 時志後を命し終る海月乃面 身を
上 終る海月乃面 身を
終る海月乃面 身を

あつちり人の書やみぬくうらぬぬと由
裏あし七日の夜終る入の俊若界
月あつちり人書やみぬくうらぬぬと由
を同わら書
と人志まことなりき人そをぬ部よより
一 衆北なる着ふおる海月乃面 身を
三 時志後を命し終る海月乃面 身を
上 終る海月乃面 身を
終る海月乃面 身を

あつちり人の書やみぬくうらぬぬと由
裏あし七日の夜終る入の俊若界

あつた事とて久しむに信者乃衆人云

人の心とて ~~あつた事~~ あつた事 ~~あつた事~~ あつた事

~~あつた事~~ あつた事 ~~あつた事~~ あつた事

あつた事とて久しむに信者乃衆人云

二 評ふれしを教れ役をさすもよき同中
三 名の下むりかへ流すもひもや孤る屋
上 雲やかみの悪く志は心の害味て夢
四 樂をうらみ人 恨の吾教さうら登
五 ぬけまのい命子枯葉をうらよ
六 又お世やう代と成もさう入るお徳ふ 上 泰
七 平年をうらよよ 芋田と成るおさうら
八

五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 山の隅を御守りてまほしき
二 舞はまのうまやとさうらあ
三 打くはらう事てまほしき
四 我れは胸のりあり涙を
五 せは涙をさうらあ
六 雲やかみの悪く志は心の害味て夢
七 樂をうらみ人 恨の吾教さうら登
八 ぬけまのい命子枯葉をうらよ
九 又お世やう代と成もさう入るお徳ふ 上 泰
十 平年をうらよよ 芋田と成るおさうら
十一

御もまた雲霧園屋門扇敬光とみら
くして携も妙方侍を扱乃通其金
乃砂をきき回方のゆこめれ玉のふを
入んあとも光をわき添移ひを御を
あおきし一筆流の部は思成のすの
しも色かやとあふさうりけりさう
千顆万顆のみさあう乃扱をつて
上中下

き拍あう葉戸の旗乃膝しあふあ
き拍あひしく頼乃あもあひけり
上上 銀の心をつてきて
志日悔をいさされたりああああ
金の山をつせてハ銀の月光をいさ
よりあふさうりけりさうり
海も不老門の常あを回月なりとふ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

天教

是、唐、漢、の、帝、に、は、

○天教

作り物 大教也 脇人 教は并ラる教

是、唐、漢、の、帝、に、は、唐漢は下也

は、唐漢は下也

氏ある一人乃子を唐漢は下也

名はく唐漢は下也

母愛中亦天より教あり唐漢は下也

とる唐漢は下也

天

名を天教と名づく。後教始むる。
 うへに書かう妙ありて。世人感を得く。あ
 たりなるや。ならん。とらば。口は。うへに。
 さ。よ。せ。び。ひ。皮。教。と。名。書。か。し。
 お。ま。教。は。く。ま。お。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。
 ほんま。の。ま。

内裏にめりし。雲龍閣阿房殿。あまへ。

かしら。

かしら。

うねるや。

この勅定。

尉存板。

藤平扇。

まて。

羅魯に列連く心此出を胸丹燒白塔湯
中いもささるんを捲る結清葉をとうむ
芝塔秘師み屋乃ち秘命り我く歌く
料あしとありあるに流るぬ家海いと
なを被る柳下共おもつと思ふ心あを
ささるる着はもあをも現あもあの中
そうめさく上若のしんさる

と知り心秘のく周のうつみ生れさ
て思ふんと思ふ心あそ思ふぬありの思
ひあを唯なふ物へ思ふは身代いのち
ちさうねあを思いのら乃思つそねあを
わき
いふおじ肉お思うまくの腹さしはり

あつこれ勅使あき
勅使あき
さへ念云被うつ

七
一 空を世々まとのるは親子に生れえ
二 目 電別離者の思ふはくはじまき人
三 志をこめてしむるを執て我也
四 心乃周深く悔の波小漂海半生
五 世も色も皆すての計乃 羈を世乃
六 同 くらしは乃海も沈とや 曲下 比をさう
七 歎をまをな海翅まく親子はまき

一 心乃周深く悔の波小漂海半生
二 世も色も皆すての計乃 羈を世乃
三 同 くらしは乃海も沈とや 曲下 比をさう
四 歎をまをな海翅まく親子はまき
五 志をこめてしむるを執て我也
六 心乃周深く悔の波小漂海半生
七 目 電別離者の思ふはくはじまき人
八 空を世々まとのるは親子に生れえ

かゝる其あうのおあすまゝあうれあすま
の彼を勢あそとらりあうらあうけの
急のうらまひく縁行のもあう年業六
有難屋大屋面や西志まおく海風業
あまやわの風柳葉を拂つて月をま
すく星とあひ河お争かまや鳥鶴
れ搖乃りらお紅葉をまき二里のや

上 此れ前お風冷屋ふあもてあま
らくほもまやあらぬらあれあう南星
いおお措お乃あ園のあうらまの彼まふ
をらすひの境を月ようそふあ水た
いあまはまうら神をうらまやあ物の
舞あもあ時そてあま乃つ既後とあ
あまはあうれあめくとあもああ

のを月日知とあくうらまいて取をば入
 世をばいし我衣もやと見えんはの里
 月夜をやくとあはれなりく
 体のおすまのふつぎうてはあはれまひや
 村取乃ありまらして作是なる唐りふ
 宿をわかつりやとあひんふふは肉
 葉肉中山 面曲見 一く上 木 葛常 座藏扇 ま か 松 風 草 露

此宿ふ海ふとくは西本のあつる唐人
 色あくくんととめるおふはよとも人
 一宿をの宿をよひし修へ 実 出 家 の
 中一宿ハ利益なり久けまじいともあか
 らこそやく彩のあまもあふのちあつる唐
 てな中とは力をまゐる人き ち こ い く

肉はりまきくたふりく海ぬふちよあり
 たかたつたきととれかりあへ
 目とられけの二番をゆもせたまへん
 もやらぬとふと夕霧の薄の宿はうま
 うく左神をさうて交てゆふありあまや
 旅人 書 病 上 水 中 小 下 雲 中 ぬ 下 ら 中 る 下 ま 中 して 下 く 中 東 下 雲
 お茶家ぬ乃あま 上 かくも 中 あり 下 ま 中 ね 下 て

月おあらんうま 上 や 中 お 下 八 中 住 下 者 中 乃 下 松 中 かく
 風とんして旅人の羨とさ 上 ま 中 なる 下 あ 中 よ 下 く
 いふあるしに 上 人 中 さ 下 事 中 の 下 作 中 何 下 事 中 ぞ
 作 上 せ 中 二 下 ね 中 ぶ 下 ね 中 う 下 ら 中 づ 下 る 中 木 下 鼓 中 打 下 れ 中 く
 舞のい 上 ち 中 う 下 乃 中 は 下 ぶ 中 雲 下 ぬ 中 ぶ 下 ち 中 う 下 作 中 へ 下 実
 めく 上 田 中 ぶ 下 一 中 人 下 ぞ 中 け 下 人 中 乃 下 う 中 こ 下 見 中 ず 下 て 中 人 下 ぞ
 おつ 上 いて 中 あ 下 ら 中 連 下 なる 中 物 下 終 中 乃 下 ん 中 終 下 つ 中 ぞ

後戸のりん ^{りん} 出らハ物流る入 ^{りん} 若
圓天まきは淺るをいひく 儉人まおの
く ^{りん} 小軍士と ^{りん} 儉人ま ^{りん} 小
比内裏うく 後給の役 ^{りん} をあ ^{りん} 小
うお教おとら ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
ま ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
あやま ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小

列進を ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
い ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
流 ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
く ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
らの人 ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小

い ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小
ゆ ^{りん} 小軍士は役を ^{りん} 小

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in red ink. The script is cursive and appears to be a form of Arabic calligraphy. There are some small red markings and underlines throughout the text.

Handwritten text in Arabic script, continuing from the previous page. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in red ink. The script is cursive and appears to be a form of Arabic calligraphy. There are some small red markings and underlines throughout the text.

梵天王三志帝梵志摩王四志持幡
即持集佛
あふらこひらありそ海のありき物と
らしてうらひ入る座あふひかありて
法志く一ふ来作とてさひひけ持を
少人ぬれ坊とてさひひけ持を
しやとぬれ坊とてさひひけ持を
しやとぬれ坊とてさひひけ持を

乃ちあつてり後うううううううう
あふら腰帯扇わき
乃ちあふら舞の夜おをさし
うううのさうさありさえいさるるあ
書れそ出果してゆりまはり
おのさひさあけれあうあうあう
は舞乃らふあうまはりあうあう

まのうらみあな象は乃受持はありて後
成男子のさうしはあやむいゆんし
ちぬそぢうのひのひのり
身のみりしをまんまにのりまやま
まよくも我ありしやあきまはあま
まねたなくあまおたりしるまはま
あやめらりしをまはあやむいゆんし

名の書ありしをみまのりてまはあま
しうまはあまはあまはあまはあま
あまはあまはあまはあまはあま
乃とのまはあまはあまはあまはあま
はあまはあまはあまはあまはあま
ありとあ人のまはあまはあまはあま

うそいふも... 友人多る... せいの... 尉面厚板水衣腰帯扇

△又... 多... 多... 多...

天の糸... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...

△... 多... 多... 多...

一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...

あらはにせしむるに *あらはに* 今めうし *あらはに*

をけり物ふか *あらはに* 名河もよえ *あらはに*

さく *あらはに* *あらはに* *あらはに*

し *あらはに* の子を *あらはに* *あらはに*

あらはに *あらはに* *あらはに*

さるものてん 言われは

目録をふれしむるかゆふ

はく身の中の日ふ對面はく

はくはれしむるかゆふ

きうーまじいよと日本人也
たうや新海乃神も納文し
たうや

いふよ遊子もまて人あきし
あ

あやあやとつまて
あ

く
あ

あ
あ

あ
あ

いふてまてすー
あ

今事ハ口
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

あ
あ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

この時を遂に法め

の

大田の

社

社

社

社

社

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

し面悪尉鳥甲白塗清き袴衣大口腰帯扇

天女髪之上三雲天冠長納大口腰帯扇

天女
我ら乞ふは以実相乃室をわくう井の

ちりくらしき小むらりと霞に人結縁の衣

生おうこ乃神掃姥とふあふなり我を

又縁は生を利益をんて東浦を

日暮小舟浦源大更乃神は我ら

思ふ難や言ふありの記沙都

か人あひねぶ光りつるをある斗之
わけて色染むを何さかばさや舞系糸の掛
まほしくしは掃人亦ん掃りまん建
と進もいそれすらぬ役を糸竹の
甲にもあたる古鼓乃役別あ身源空
かかきいひとさそか思ひ出るは
打くる古鼓の衣後甲色だかなるひ曲

源
とそへてむらも救ある樂拍おとす
あるは流の志くへおとす流やあま雅や
月と照そひを風と清くもて神さ
さしるおかしふたきおそ人も業也
て感念なとらあるへたすはてや神お
かゝるをさなれは業もあなるお代の

あるしちせひのあふあふしてさう金
いさあくてんよせうをさうさうあう
のやうなる時はおを後をまじと神さ
井も時梅のかとあめらふならねを
お小梅の初乃役さしてさう名跡乃ん
あうやうくあう名跡のを城系のを乃
あや二十又廿ひのあまのさうあは

源

しん

くはるるをふらふと
ゆりなほ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

放生河

脇三大長
烏帽子御友掛系振
狩衣大口腰帶扇持

蒼子
上 彩とあふく城志は
わさしあ
さ 給来は
さしあ
さ 栞は鹿嶋乃神職流
波のあふりと我事也
あふく海陽乃志社里
糸流 日比八月十日菊糸此中
と八情も美信は
上 ちやま
上 ちやま
上 ちやま
上 ちやま

七朝やせきくまの死もさるるも
山伏の里と書かぬ竹田の系を
て流の續稿はけまくと赤のや神考
八幡の里にまふりく

懐山小巻の折神の神祕のお細

男のすのせ

一、尉水衣 水桶右持
二、男水衣 腰帯 袂髪 扇持

上 續乃生考を故川の故小月と物や枯の

水 外山松のせと神の意のあらえ
上 文回と流めんと書へ書と書一画を
去半ぎく如流代乃例なる故よ志
有 流系流とゆちも又あひの
か 横長の竹を文とゆみら書画乃紙
ひ さらし かの意の乃度と書乃
海 志 鱗のなと 生る物とて

あつて年を東洋の...
てまゝく...
まゝの...
枝を...
海...
ハ南社の...
皆人...
清浄の...
あつて年を東洋の...
てまゝく...
まゝの...
枝を...
海...
ハ南社の...
皆人...
清浄の...

きよあ成よ是成...
の東...
乃...
ま...
ま...
と...
海...
きよあ成よ是成...
の東...
乃...
ま...
ま...
と...
海...

えんぞく 糞濯も月一縛ひらくくじふ
やんのかからみ桶と水底小洗むは奥
袂の繕ありやみ紙うめらて先法乃
漂着の葉動くも魚乃捨ふは換の葉も
生るもとぬけなるるに捨ひあつた成なるの程と

教生舎の子細悉く物使へ 愈よりよ
すゝめし台 同上 押由社と上飲的天皇の事もよ

一 二百余葉の世とてびら小福らた
志ま 目録 宗廟の神うて代を
あつて國書試き金 文武より乃た存
く九守つて皇八儀の神あもはるる八のき
又徳仏世の女身定 志生石生たたを身
志心西乃我教し人佛ふに此は心きて西
乃がうふよやまらぬふ 典下 人乃國ある我

他の命ありはわたりと誓ふをばし神のま
る難や我くもあまの清きまをばいし
志願りのそと格形はわたりてあまの
此の法のあまの神格を祀の教を
の心も洗月乃光も三北家母に
されしやも宗廟乃魂の系も
成乃と形りて玉皇氏の電をばし

男山

此由調和深の波も形あり
存生の移ひは世業の非徳に形
や男山ありは格も華も
実おれはひきあえ格乃山
系懺悔の心もあまの神さ
ひて月もあまの神さ
おの神さ

一 社名もたてしるふゆえに河原に
 二 神の御幸をさしむれえいさき起らる
 三 神の御幸 山下ふつるなる神の御幸
 一 忌の衣は神をさし あり振成天し如
 二 久保八月の桂志男山 日 日
 三 西かき神代色和弁とあけく
 一 とるうの御幸もさし 中にお忌の御幸と

一 一 社名もたてしるふゆえに河原に
 二 神の御幸をさしむれえいさき起らる
 三 神の御幸 山下ふつるなる神の御幸
 一 忌の衣は神をさし あり振成天し如
 二 久保八月の桂志男山 日 日
 三 西かき神代色和弁とあけく
 一 とるうの御幸もさし 中にお忌の御幸と

こころの志をふたにけりく あはれ

是のやれ弱字戸の志をふたてい文を

神のり致もふれをふたなる男の眼を

て一方をふたてい人事てい

あうするゆてい して女を織 二人あう うの

のし後そ神のまを立波風をん

この志を乃神志代を 思ひをり梅

入る神や色一神代乃後とめく

ゆる波の白本綿うけく梅風の

へて破乃まうれを舞あり後

おの例家 か 実名成皮も

し女が く の あ ち ま 人 あ け

あふ神 あ の ま と う げ あ ち

を あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

を あ ち あ ち あ ち あ ち あ ち

一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十

こころてかくまはるゑははるゑあへんは あへん

を留と山物修り 山物 柞地非み代の非

とふられを舞あをせとの香と戸也とて又の

山非約計を魚ふとて終終さるもてあ終の

終ひを玉非と契つてはに非約計は満十の玉

とととりてゆり終ふを及を玉非終あ

く海懐姪とて一はは海道お山非を全とて

とらふはるるて舞らるる風はかきよめり

とあそびはるる風はかきよめり

轉好まらるる風のきよめり

日は梅乃りあふあつるる風はかきよめり

てから夜をゆらうのそめくあつる風はかきよめり

謂と空のそねやをまじゆらとあつる風はかきよめり

若らるるそあま娘 非乃山後のみり

とらふはるるて舞らるる風はかきよめり

とあそびはるる風はかきよめり

轉好まらるる風のきよめり

日は梅乃りあふあつるる風はかきよめり

てから夜をゆらうのそめくあつる風はかきよめり

謂と空のそねやをまじゆらとあつる風はかきよめり

若らるるそあま娘 非乃山後のみり

くあさ^トを^トけし^トじや^ト梯^トお^ト登^ト新^トなる^ト人^ト公^ト
道^トに^ト登^ト夜^トある^トも^トじ^ト西^トや^ト毛^トを^トく^トも^ト
言^ト世^ト中^トの^トあ^トい^トあ^トま^トは^ト清^ト奥^トの^トあ^トれ^ト
を^トあ^トめ^トて^ト衣^トを^ト織^トた^トか^トや^トい^トあ^トま^トは^トけ^トあ^ト
う^ト乃^トも^トあ^トり^ト非^ト乃^トあ^トれ^トあ^トら^トひ^トき^ト一^トれ^ト
あ^トち^トや^トよ^トの^トち^トを^トあ^トら^トす^トと^トも^ト非^ト乃^ト
世^トの^トあ^トら^トん^ト上^トも^トあ^トれ^ト業^トの^ト梯^ト乃^トを^ト登^トじ^ト

ち^トる^トあ^トり^ト白^ト落^トれ^トあ^トら^トう^トく^ト移^トく^トあ^トら^トわ^ト
新^トの^トあ^トら^トん^トの^トも^トあ^トれ^ト長^トく^トあ^トら^トわ^ト
し^トま^トあ^トら^トむ^トび^ト移^トら^トぬ^トの^トあ^トら^ト乃^トあ^トら^トわ^ト
探^トい^トあ^トけ^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トよ^トむ^トり^トあ^トら^トす^トの^ト
た^トま^トく^トあ^トら^トむ^トあ^トら^トえ^トら^トむ^トと^トあ^トら^トす^トの^ト
月^ト既^ト也^トの^ト新^トあ^トら^トぬ^トあ^トら^トよ^ト上^トあ^トら^トす^ト
あ^トけ^トさ^トら^トあ^トら^トす^トと^トあ^トら^トす^トて^トあ^トら^トす^ト

一六上
お重なる朝の思草 長途より舞さ
一六上
少舞世 名を守り舞合せ此
一七上
邪れおつ甲屋舞世をるも世世志を月
一七上
あまのつら 舞のうまお我もわくは舞
一七上
ご思さす世代乃林の月をるも世世志を月
一七上
ラの羽舞合せ此のきれ習合はひぬ舞
珠の珠乃玉は世世舞六河くしてはそ 一七上
珠の珠

珠のおの玉を世とばあはるも世してはそあ。
被い我ハ人君あはるは舞やては舞也 一七上
るおあはるは世ハ舞なる世の化現をる世世
ひへては舞はははは 一七上
お舞さる世ハ舞乃林ハ舞成玉は世世
一七上
玉の世世は舞を舞世ははは 一七上
一七上
一七上
一七上

何そと人のさひし時高き言へはあゆみ
 熱中邪まじくのなるめりりやあふ
 わじき壇のうらなふと神とを唯
 ねあそよあめとよむ始に我と海とにま
 くるらわくまきあやまらるく
 はねたふと縁居て月をうそふく雲の阿
 非の世をもゆるらん下

面泥眼診裁落露
 将衣袂切腰手扇

八歳の若女氣珠を捧て愛如祝し我ハ
 湖乃道下の玉を捧て智人の海に珠を
 ぬれや上 南宮波衣中元まぬる玉 或ハ不取
 雲の其の玉 又今帝妻は海を海に非魚の珠
 日上 各く抱く多き事と云海増減は道下の玉まぬ
 ありやあつる玉上 下珠を海に沈むまぬ
 まるや湖を下波と改てよむ海に南宮

海のすくならやらと二程の非業
やし海の本を地をさし代われば
志乃西影のさなき時上や下
なう乃重書れ非魚く下来うからぬ
海乃まぐくならるるさう書書や使えれ書の
交化の中肉のうけさく下雲乃上る
玉及れ月也老やみさう人く下皆さ

ゆうをさるめい入尉是凡柄書
まもまもをさるるさう雲乃かまの殿の物の玉
まこれが家時代ふ多半よと考うれ
まか生のあつまれを乃思あや下わさ
まやふ美信の人かあやをい中いさなる
まの御幸乃さるふさうかんあふそとさく
より美信の人をさるさうは御書あさ

乃浦小住志あるる為新依り方と云ふ
天と納交し地と云ふなりまはしむる
事り事りわさそとまはしむるむむと
なるるなりまはしむるそとが
とらるるそとらりやび年すん
慈となく上となくなれん志と
清く水乃せせとあはる竹の枝依り

下
是ら交りておびよう物思と云ふ
心なれ精あはる乃本と云ふは
枝のわら白雲ありまはしむるなる
丹乃統又泰山の山下水と云ふ
車と云ふは推乃本と云ふは
楊柳上ものふあらん概乃本と云ふは
秋葉の桐の本上と云ふは概や

いふにふしむるまのなをいふにふるまをい
現るるむね光の中よりとまらぬれをい
てていふにむね不ふらるるありて虚をい
おありていふにむね不ふらるるありて虚をい
め天海をいふにむね不ふらるるありて虚をい
と思ひていふにむね不ふらるるありて虚をい
如波の如くありていふにむね不ふらるるありて虚をい

甲乙にありていふにむね不ふらるるありて虚をい
その年の神をいふにむね不ふらるるありて虚をい
あるにありていふにむね不ふらるるありて虚をい
まはれありていふにむね不ふらるるありて虚をい
外にありていふにむね不ふらるるありて虚をい

中 後々格カリ石 同上
タイキハニナ向強 加らふにむね不ふらるるありて虚をい

備符 金札 墨岳
信被伴切腹等ヲ夫

唯知りていふにむね不ふらるるありて虚をい
飛を重の沙汰の罪

續光色河くくおんくはふきあをほり
沙海くわいおんもやまあひの
八百年代のさるいなまもく
のまの月弓 さえ又月よふをくたは
あはる神を後乃ひより本 多神託教
くよなを神かれ悪魔を祀りひき
よあはるも重胎支部乃がらあり

おろくも道ののちの流代とそか
おろくありあへはうけうくあはる
を流めまもあふ民をちり乃流れい
常水枯乃おそれあはるを弛し
あをさふ流も世なまもや東夷初成南
あをさ中こなまもあはる乃
おろくも流もあなまも ぞろく流も
おろくもありあへはうけうくあはる
おろくもありあへはうけうくあはる

二二二
三三三

齊虎才

吳服

伊予地衣

脇三大臣

舊帽子調友掛原松栢象
大口脇笏扇つ連同古

道のみらるる時ぞや
玉簾くはなる

らん 柝を今ふつと
玉簾くはなる

我着形乃子細なるふ
玉簾くはなる

後信くは又是より
玉簾くはなる

あうまやと
玉簾くはなる

浅き波
玉簾くはなる

ぬらひもなまじく今更清のたうけく
云のまよれ祀まてとあうりさぬのまえ
へてをまらうく善し神は妙あるかうりぬ
我げねあよまて及まは清のた

今有る女性二人の枝をうると二人の糸を
引ただひまきれ里人と名をよぞとかく
ふあゝの人そ 犯りやまよの世ある糸

乃湖をうらるる月の影ふたへ浦波のま
おまを枝のまよと名をよぞとかく
あまよの世や犯りやまよの世ある糸
はみよふまよの世の里と名をよぞとかく
清まよと名をよぞとかく
糸はあまよの世と名をよぞとかく
非天をよぞと名をよぞとかく

二村山に詠一り人色をさすもたふふ也
一服なりあやし先さすも猪人乃少くかめのか
と八はさうなはひあふ物お郡人此れか老人
二我あをり知んせらるゝ其かこしやあは
一志ふはりあ家かふを難や上支後三
一川もを異教乃地あるは誠物く女乃あは
いとかなも也下結是は非切會名三錦と志

二たへさひくも中 和國是朝乃夕ひろく
一人乃あまてあひく世のわすれはも案なる
一采代乃先著くて國道民をあり下
一南平治向て 西水風物也下 惠平香
一の山字かきよ是國の勅使はあよけあはく
一其の治ひくああやめを先乃女婦をさ入
一美里の養後と後あもくあひけあはり

あく吾服の里小倉さへ入連のなる
棧の神をあるもく七續乃油衣を海物
役奉りんまうしは教成りおまある
其のるを分つて表紗を衣乃紋の
色なるを心鳴らさうつて
ありまのなるをさへあやとな
まのなるをさへあやとな
まのなるをさへあやとな

日
昔もぬ個なるなり
よるも服乃文字をなつてけ
たさのあやたさのや名付を
年を連へくをなすて續の神乃
考衣のまをくをなす神なるを
をひく糸乃海代そ同き
母付てをば若れくがそ

あつたははのまのあつたははの
たりふひをわが家の紋りしるる
時代うか 是乃か 是乃か 是乃か
波あまそそそあま接乃言 神を
織けは物の中お想字乃字をわう
衣ら石乃上ふ想あはあ 杉の風
又破うは破乃言 是乃か 是乃か

あつたははのまのあつたははの
たりふひをわが家の紋りしるる
時代うか 是乃か 是乃か 是乃か
波あまそそそあま接乃言 神を
織けは物の中お想字乃字をわう
衣ら石乃上ふ想あはあ 杉の風
又破うは破乃言 是乃か 是乃か

